

「江蘇大学研修 参加報告書」

京都大学文学研究科修士1年
菊池信太郎

今回の江蘇大学研修では、日中文化交流ということで、京都大学大学院文学研究科修士課程の一員として、江蘇大学日本語学科の院生さんたちと交流しました。江蘇大学では日中の学生の研究報告と杉本先生の講義が行われました。日本文化に関する研究が主なため、報告や講義はほとんどが日本語で行われたにもかかわらず、江蘇大学の学生さんたちは、学部生も含め積極的に日本語で質問しており、その学習意欲と日本語運用能力の高さには感銘を受けました。外国語の習得に際し、間違いを恐れず積極的に使用していくことが如何に重要なことか実感させられました。また、彼らは日本の文化にとっても造詣が深く、歴史上の人物から名探偵コナンまで幅広い話題を共有でき、初対面にもかかわらず旧知の仲のように会話が弾みました。

江蘇大学では他に、院生さんの案内のもと大学の図書館や博物館を見学させていただきました。江蘇大学は敷地がとてつもなく広大で一つの街のようになっており、学生さんも多いため、図書館も非常に大規模なものでした。中国では新学期が始まって間もない時期にあたり、試験期間にはあたらないと思われませんが、図書館は自習に励む人たちであふれており、勉強に対する真剣さが窺えました。また、博物館では近代以降の江蘇大学の歴史に関する展示を見学し、農業を始めとする理科系の分野を得意とする江蘇大学の成り立ちを学ぶとともに、江蘇大学と日本の大学との相互交流の歴史についても学ぶことが出来ました。

江蘇大学の先生方と院生さんたちは私たちがとても歓迎してくださいました。中国料理を振る舞ってください、また、鎮江の街の名所旧跡を案内してくださいました。なかでも三国志で有名な北固山には、奈良時代の遣唐留学生であり長安で客死した阿倍仲麻呂の碑文があり、日中文化交流の歴史の長さ、その末端に自分たちが加わることができた喜びを感じました。

今回の研修は短い日程ではありませんでしたが、壮大な中国文化と中国の人々との触れ合いを通じて、国際的な視点では日中の歴史的な繋がりに始まり、個人的なことでは勉強に打ち込む際の姿勢に至るまで、非常に多くを学ぶことができました。特に、江蘇大学での交流会の際に学生さんたちと日本文化についての話題で盛り上がったこと、鎮江の街の名所を見学したことは、自分の属する文化についてだけでなく、相手の属する文化についても、「もっと知りたい」と思うことがたくさん生まれるきっかけになりました。ここで得たものをこれからの研究活動に活かせるよう励みたいと思います。